寄書

日本の風景は東北にあり

岩手　藤花

「日本の風景は東北にあり、東北は恰も、支那の蜀の如く、又歐洲の瑞西の如し。」とは誰かゞ云つた語でありますが、實に我が東北の地は、風景の佳に富んで居ります、松島象潟なんど昔から名のあつたのもずゐぶんありますが、またあまり世間へ知れて居ないところにも、去り難い眺めは澤山存して居ります。我が里はかゝるところにありて西には岩手の秀峯屹然として、その壯大なる姿を雲上にあらはし、北水の流れは中央の平原をうるほして太平洋にそゝいで居ります、實に雄大なる、壯嚴なる、他にあまりその比を見ないことゝ思ひます、かゝるところをとつて畫にしたならば、眞に大なる作が出來やうと思ひます。風景を愛する諸君、三脚を手にし、スケツチ箱を肩にして、我が東北の地に、壯遊を試みんとする人はありませんか。

海岸の一日

長野　パレット

此處は柏崎の海岸だ。私と親友O君とは砂原をザク〳〵踏みながら彼方の丘に向つてゐる今しも海は午後の太陽に照りつけられて濃い濃いインヂゴーに染つてちぎれて飛んでゐる白い雲の下には佐渡が烟の樣に霞んで二重にも三重にも重つてゐる。丘には何とか云ふ尺ばかりの草が密生してゐる。はげしい日光に抵抗はしてゐる樣なもの〻葉はガサ〳〵して光なく埃でも積つてゐる樣だ。丘を下ると一寸した林がある。其中に這入つてだろい樣な波の音を聞きながらスケツチした。白つぽい砂に入り亂れた幹に青い青い葉、丁度晩霞先生の小笠原島の畫にそつくりだと思つた。

三時間ばかりこびり付いて其處を出た頃は夕榮えの色鮮にオレンヂ色の空には紫の雲が三つ四つ投げた樣に浮んでゐて白帆も何時の間にか無くなり汽船の烟のみ長く〳〵引いてゐた。後の山はどれもどれも順を追ふて黑ずんで行く。

CHANCE に就いて

一會友

漱石著「漾虛集」中の幻影盾にキリアムが其戀人の父を夜鴉の城に攻むる數日前初夜過ぎに冷たい臥床の上に既往を考へ出す條りに左の樣な處があります。

「……ある時は野へ出蒲公英の莖を吹きくらをした、花が散つてあとに殘るむく毛を束れた樣に透明な球をとつてふつと吹く、殘つた種の數でうらなひをする。思ふ事が成るかならぬかと云ひながらクララが一吹きふくと種の數が一つ足りないので思ふ事が成らぬと云ふ辻うらであつた。するとクララは急に元氣がなくなつて俯向いて仕舞つた。何を思つて吹いたのかと尋れたら何でもいゝと何時になく邪慳な返事をした。其日は碌々口もきかないで塞ぎ込んで居た……」(P.bb)みづえ五十號